

平成26年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成26年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ヒラメ

学名 *Paralichthys olivaceus*

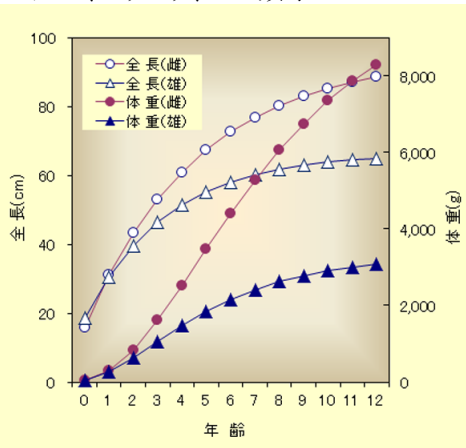
系群名 日本海西部・東シナ海系群

担当水研 西海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 12歳
成熟開始年齢: 2歳(50%)、3歳(100%)
産卵期・産卵場: 冬～春季(1～4月)、鹿児島県沿岸から鳥取県沿岸までは南ほど早い
索餌期・索餌場: 周年、沿岸域
食性: 着底後の稚魚はアミ類や魚類の仔稚魚、成魚は魚食性で甲殻類やイカ類を捕食
捕食者: 着底期に同種のヒラメ、アイナメ、ホウボウ、ハゼ類等

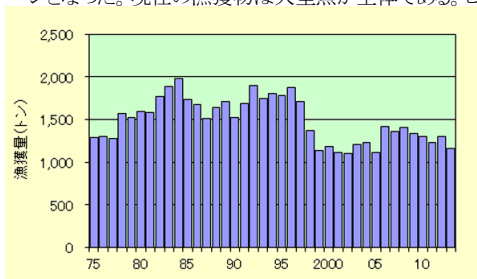


漁業の特徴

本系群ヒラメを対象とする漁業は、刺網、小型底びき網、沖合底びき網、釣り・延縄、定置網などである。2013年の県別の漁獲量は、長崎県(400トン)、島根県(178トン)、熊本県(169トン)、福岡県(160トン)が次ぐ。本系群では1980年代から事業規模での種苗放流が行われている。近年の放流尾数は減少し、1999年には560万尾であったものが2012年には387万尾となっている。

漁獲の動向

本系群の漁獲量は1984年に1,982トン記録した後、1,500～1,900トンを維持していたが、2002年には1,103トンと減少した。その後、漁獲量は緩やかに増加したものの、2009年以降に再び減少傾向となり、2013年の漁獲量は1,161トンとなった。現在の漁獲物は大型魚が主体である。ヒラメを漁獲する主な沿岸漁業の漁労体数は減少している。

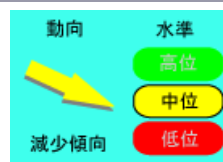


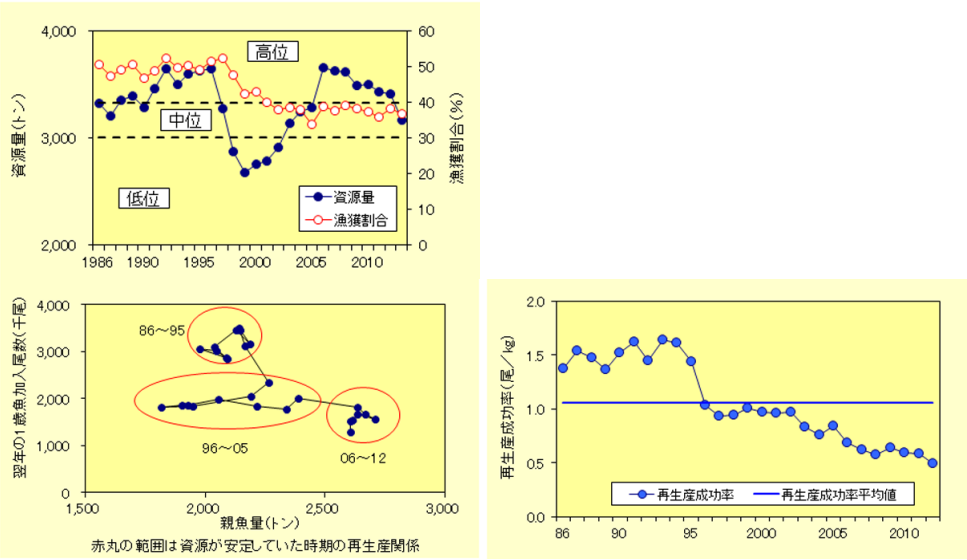
資源評価法

漁業種類別の年齢別漁獲尾数を合計し、系群全体の漁獲尾数を求めコホート解析を行った。小型魚の保護が行われていることから、1歳魚以上を解析に用いた。自然死亡係数は0.208とし、最近年のFの値は過去3年間の同年齢魚のFの平均値とした。親魚量の下限値(Blimit)は、加入量の上位10%(R-High)と再生産成功率の上位10%(RPS-High)の交点となる親魚量(2,144トン)として設定した。

資源状態

本系群ヒラメの資源量は1997年頃から急減し、1999年に2,674トンまで減少した。その後資源量は回復して2006年に3,653トンのピークを迎えた。2013年の推定資源量は3,168トンとなった。現在の資源水準は中位、動向は減少と判断した。2000年以降は1990年代と比較して漁獲割合が低くなっている。1996年以降再生産成功率の低下が続いている。2013年の漁獲係数Fは0.49で、資源量の維持を目標とした限界値(F_{sus} : 0.44)より大きく、資源尾数の動向には今後も注意する必要がある。加入あたりの漁獲量を最大とするF(F_{max} : 0.31)より大きいいため、成長乱獲の状態と判断される。





管理方策

本系群のヒラメでは1996年から再生産成功率が低下し加入状況が悪化したため資源量が減少したと考えられる。近年の親魚量は2,460トンでBlimit (2,144トン)を上回っている。ABC算定のための基本規則1-1)-(1)より、FlimitとしてFsusを、不確実性を見込んだ0.8・FsusをFtargetとした。

	2015年ABC	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	989トン	Fsus	0.44	33%
ABCtarget	827トン	0.8・Fsus	0.35	28%

- ABCには0歳魚は含まれない
- F値は各年齢の平均値

資源評価のまとめ

- 資源水準は中位、動向は減少
- 現在の漁獲は成長乱獲及び加入乱獲の状態
- 再生産成功率は1996年から低下し、低水準である
- 現在のF(=0.49)は、資源を維持するFsus(=0.44)よりも高い
- 現在の親魚量2,460トンはBlimit (2,144トン)を上回っている

管理方策のまとめ

- 親魚量の維持、小型魚の保護および加入動向の把握(種苗放流含む)が必要
- 種苗放流により再生産を補助するため、放流尾数を増加する

執筆者: 中川雅弘・吉村 拓

資源評価は毎年更新されます。